

第2章

オペレーション・テクニック

2.1 覚えるよりも慣れること！

● QSO はコミュニケーションすること、つまり交信することである

どういうわけか、QSOをたいへん難しく考える人が多いようです。

朝起きて家人がお互いに、「おはよう」、「おはようございます」、「パパ、今朝は珍しく早起きね？」などとあいさつを交わします。

会社や学校へ行って、同僚や学友の顔色が良くなければ、「どうしたの?」、「気分でも悪いんじゃないか?」と心配しているこちらの気持ちを言葉で表現します。仕事か勉強に熱中しているときに、友人がやってきて「お邪魔かな? ちょっと話があるんだが」といった場合に、「うん、もう少し後にしてくれないか」とか、「いいよ、大した用事をしているわけでもないんだ」などと、そのときどきの状況に合わ



せて返事をします。

これらはすべてコミュニケーションなのです。OMがYLに向って「君、今日は和服で一段と美しいね」「ありがとう」「ときに、今夜映画でも見に行かない?」「今日はダメ、同窓会があるの」「じゃ明日は?」「えー、いいわ」……これもすべてコミュニケーションですね。

ところで、意外に多くのハムの方から「QSOのしかたがわからないから、呼んだ場合、呼ばれた場合のあいさつからRSTの交換のしかた、QSLのダイレクトあるいはJARL経由それぞれの場合のいい方、そしてファイナルの送り方など、ヒナ形を示してくれ」といった問い合わせが私に來ています。

この本でQSOの内容をヒナ形に示すことは、筆者にとっては簡単なことです。しかも、多くの読者からのご要望とあればそれに応えることは筆者の義務である、と考えます。

しかし、QSOとはコミュニケーションすることです。ゴム印で押したような、いわゆる“rubber stamp message”の内容をここに示して、それをそのまま内容をよく考えずに、照る日も、降る日も、愉快的日も、おなかが痛くてユーウツな日でも使われては、正直いって困るのです。

いいたいことだけを長々と送信して、相手のいうことも聞かず、したがってそれに対する返事もしない、というような名ばかりのQSO、つまり情報なり意思表示なりのやりとりのないQSOは、真のQSOとはいえないのです。

しかし、こう書いた以上は読者の要求に応じなければ筆者のいう「相手のいうことも聞かず、したがってそれに対する返事もせず」になってしまいます。つまり、コミュニケーションをしなければ、この本の価値がなくなってしまいます。ですから、QSOのヒナ形(のようなもの)について解説をします。が、先に申し上げたことをぜひお忘れにならないでください。

つまり、相手と「お話」するのだ、ということ。相手の意志を尊重しつつ、自分の意志を表現してこそコミュニケーションが成立するのだということをぜひお願いします。トン・ツーに自信がない、Q符号がわからない、英語が弱いなどとおっしゃる方も多いのですが、英語については許せるにしても、最初の二つについてははっきりいって「あなたはハム精神をもっていないのか?」と問いたくなります。

受信機を使って、もっと時間をかけてハム・バンドを聞いてください。そして、

ハンドブックなどを買ってQ符号を覚えてください、とあえています。お互いに自分でやるだけのことをやってから、「他力」に頼ることにしたいと考えます。

● 言葉は目よりも耳から覚える。そして「学」ではない

外国語を上手に話す人のことをよく「語学のできる人」と呼びますが、私は語学といういい方には反対です。こんないい方よりも、やはり「話術」に通ずることですから、「語術」とはいえないでしょうが、「外語術」とでもいいますか、まあ呼び方なんかはいつでもよいのですが、ともかく「学」ではないことを強調したいと思います。そこで、活字を頼りに「外語術」を覚えることは非常に難しいことですし、文字を通して教えることもきわめて困難なことです。

● 日本語化してしまった「外来語」が多いのでやりにくい

文章を書くときには一向に不便を感じませんが、たとえば「アイデア」という言葉の一つ取り上げても、これを日本語の発音でいうと大部分が英語を母国語とする人には通じません。ラジオやテレビのアナウンサーが「アイデア」を発音するのを聞いていると、最初の「アイ」にアクセントが強く、「デア」と落として平板に続けていきます。ところが、アチラでは「アイ」が平板に弱く「デイ」が強くて、「ア」とまた弱くなります。こういわないと通じないので、われわれからいえば「始末」の悪いことです。

アクセントのことはまだしも「デイ」なんていう音は、日本語にはありません。これも困ったことです。まさかQSOの中には出てこないでしょうが、あの食後の「デザート」に食べる「プリン」になるともういけません！第一、「デザート」が通じにくいわけですが、まあこれはあまり詮索しないとしてもdessertのSSの部分はZのような音になり、その後が「アート」の音ではなく「ウー」と「エー」の中間の音ですから、どちらかといえば「デズエート」のようになるのが正しいのです。Puddingが「プリン」となって困ったわけですが、これはむしろ、「プリン」のままの方が原音に近い感じを与えますが、「プディング」よりもはるかによいとはいえ、やはりデとイが合成された形の「プディング」としたいところです。

ラジオというか、われわれハムに身近な例を引きましょう。前にお話したことで、バリコン、チタコン、ポリウム、ポビン、タイトのようにすっかり日本語と化してしまったものが多くあります。しかし、これらは通常のQSOには使いま

せんから、先ほどの「デザート」や「プリン」のように、ただ原音あるいは原発音と相当かけ離れていることだけを承知していればよいことです。「ベア」(ベースアップ)のように「パワーアップ」とか「フリーケンシー・アップ」といった表現は通じないということを、よく飲み込んでおいていただきたいのです。たとえば“I will now power up.”といったらおそらく通じないでしょう。“I will now increase the power.”というべきです。もっとも、これは“I will now QRO.”で済ませられますね。

「ボータス」などもよい例です。向こうではVOXといいます。国際電話ではVODASですが、ハムでは「ヴォックス」と呼ばれているのです。

「キュービカル」と省略して呼ばれているアンテナも、アチラでは省略する場合には日本とは逆に後の方だけ取ってきて「クウオッド」(「カッド」でも「クワッド」でもない)と呼びます。

日本では「メータ」とmeterのことを計器のときも、波長や距離の場合にもこういいますが、アチラでは「ミーター」に近い発音をすることなども「メータ」が立派な日本語になっているだけに難しい問題です。

外来語が変化して、発音も何もかも原語とかけ離れているのが、バリコンなどの一連のパーツの名前でしよう。ことにアメリカではコンデンサのことを通常「キャパシタ」と呼んでおり、かつvariableを“bari”とするような(日本語化)は彼らの想像を越えると思います。

日本にはVの音、つまり昔「ヴイー」と書いた音はないのだと説明しても、彼らにはピンと来ないのでしよう。ダイオードに印加する電圧の変化で、静電容量を変化させるものに“vari-cap”なる商品名を付けていますので、うっかりするとバリコンと混同されそうです。

さて、このようなことはQSO用英会話とは直接無関係のように見えます。しかし、おわかりいただきたいことは、外来語やローマ字式読み方が存在するために、いかに英会話の勉強を難しくし、正しい発音を身につけることを困難にしているかを、お互いに認めなければならないということです。

● 構文の違い、発想の違い

日本語では「807を1本使っています」といいますから、英語でもそういうに違

2.1 覚えるよりも慣れること！

いないということで、まさか“807 one”とは誰もいいませんが、つい“807 single”とってしまいがちです。

いうまでもなく“a single 807”というのが正しいのですが、日本語の「終段は807 シングルです」が災いのもとになってしまいます。

また、「6V6 プッシュ・プルによってプレート変調された807 シングル(の終段を)使っています」というようないい方を英語ではよくするわけですが、“A single 807 (in the final is) modulated by a pair of 6V6s in push-pull.”となります。

“The final is a single 807 which is modulated by push-pull 6V6s.”は、文法的には正しく文章に書くときはこれでよいのですが、会話のときは、先の例のほうがよく使われるというようなことも覚えていなくてはなりません。

「マイクはクリスタル型です」というか、それとも「クリスタル・マイクローフォンを使っています」にするかという疑問も起きてきます。“Microphone is crystal-type.”というのは poor です。“I am using a crystal microphone.”とっていただきたいところです。どうしても、前者のいい方をしたいのならこうなります。“The microphone (I am now using) is a crystal-mike.”というようにぎこちなくなります。

本来の英語と日本語化された英語の違いが、こういうところに出てきてしまうようです。

● コンプレックスをもってはいけない

いろいろとここまでお話してきたことで、自信を失うようなことがないようにお願いしておきます。ちょっとしたコツを覚えてしまえば、もうちゃんとした英語の基礎知識を豊富にお持ちの方ばかりですから、すぐに上達します。私の任務は、このコツを引っぱり出してお見せすることだと思えます。

それでは始めましょう。

CQ 40-meter phone station, this is JAIYCQ calling you and standing by.

というようないいはよくありません。

第一にロジックが合いません。40 meter の phone (fone) station を呼んでおいで、calling you とは何ごとですか？ といいたくなるのです。英語や他のたいていの外国語では、このようなあいまいさといえますか、つじつまの合わないことは許

されません。日本語だってそうでしょう。広く不特定多数の「局」を呼んで「あなた」で締めくくるなんていうことは！

したがって、

CQ 40-meter phone, this is JA1YCQ calling and standing-by.

としてください。

これも欲をいえば 40-meter というのは不要で、ただ、

CQ, this is JA1YCQ calling any phone station and standing by.

とするか、もしトン・ツーの応答も OK ならば単に、

CQ CQ CQ, this is JA1YCQ calling and standing by.

でよいわけです。

CQ を使わないで、

Calling any phone station, this is JA1YCQ calling and listening. Over.

としたいところですが、CQ を使わないとハマらしくないということでしょうか。たいがい、やはり CQ CQ とやっているようです。

フランスの「アッペル・ジエネラル」、スペインの「アテンション・ヘネラル」、日本の「どなたかお聞きの方がいましたら……」などのように、必ずしも「CQ」を使わなくてもよいのですが……。

それからポータブルのときの JA1YCQ 「バイ・ワン」、つまり分数のときに分母を A、分子を B とすれば A 分の B のことを「B バイ A」ということからなのでしょう。これはやめにしたいものです。

どうしてもこのようにいいたいのならば、“portable 1” とか “slant” (斜線のこと) というか、イギリス式の “stroke” (oblique stroke の略) を使いたいものです。

それから、2 局以上の QSO のときの「サイド」は、必ず次のように使ってください。

W6BMN with W6IZB on the side, this is JA1YCQ.

決して、“W6BMN, side W6IZB this is ……” としないことです。